
僕らはねじれの位置にいた

小宮つばさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らはねじれの位置にいた

【NZコード】

N7778A

【作者名】

小宮つばさ

【あらすじ】

「歩くイカ」知らない?「突如、道で出会った『いくみ』という少女が『正人』に問いかけた言葉。その言葉から、正人の日常が少しづつ変わっていく。

白い少女

くつそ……

なんでこの俺がガキの世話なんかしなきゃなんねーんだよ。

冗談じゃねえ。

冗談じゃねえよ。

なんでこんな……

分けわかんねガキの世話しなきゃなんねえんだよ。

ふざけんな。

朝、俺が一番嫌いなもの。

希望ある一日の始まりだとか、んな馬鹿げたこと言つてる奴らもいるが、俺にとつては希望もなにもなし……

無意味な一日の始まり。

窓の外から聞こえる、雀の声。

心落ち着かせるはずのその声も、俺にとつては不快なだけだった。

「うぜえ……」

文句を言つても、雀の声は鳴り止まない。
いつも石でもぶつけてやるうが。

しばらくして時計を見ると、短い針が十一の字をこえていた。

何時間も、俺は死んだように天井を見ていただけだったようだ。カレンダーを見れば、月曜日と水曜日にだけ赤丸がついている。

今月四個目の赤丸。十三日の水曜日。

それは今日の日付。

「さあって…買ひに行くか…」

月曜日と水曜日には俺が愛読している雑誌が発売される。それを毎ごろに買ひに行くのが俺の楽しみ。

それだけが、俺の楽しみ。

俺は玄関においてある財布を取つて、うつとうじて日差しの下へ出て行つた。

外に出れば雑音がつるさい。

子供の泣き声。

… 黙らせる。

車のクラクション。

… 何回も鳴らしてんじやねえよ。

チンピラ同士の喧嘩。

… あの世でやれ。

本当にウザイ。

世界に神がいるのなら、なぜこんな低脳なやつらを作つたんだ。他人を傷つけることしか知らねえ。こんな莫迦な連中を。

一番近いコンビニに行くだけで不快感マックス。

まあいいや。

わざわざと買つて、家帰つて読もつ。

「コンビニの自動ドアが開くとそれを知らせる音が響く。

わざわざと田舎のモンを掴んでレジに置く。

この時間は客が少ないのでレジは大概開いている。

「一百三十円になります」

レジの若い女は少し不思議そうな顔で俺から小銭を受け取った。わかつてゐるよ。何が言いたいかは。

再び「うつとうつ」と口差しの下へ出る。

長い赤信号。

ばへーっとあちら側を見ていたら、気になる子供がいた。真つ白なワンピースを着た、ツインテールの女の子。風が吹くと肩を越した髪が少し揺れる。あつちもこつちを見ていよいよ見えた。

……気のせいに決まつてゐる。

青信号。

この青信号は短いから皆大急ぎで渡る。早歩き程度で全て渡れるから特に急がなくてもいいのに……そういうや、日本人はせつかちだつてなんかでやつてたな。例えばエスカレーターでわざわざ走るとか……くだらないことを考えていると、さつきの女の子とすれ違つた。すれ違つて、お互いの間が一メートルも開かないうちに女の子は振り返つて俺の後ろについてきた。

……なんだよコイツ。

近づくな。

ガキは嫌いなんだよ。

一発怒鳴ればいいか？

いや、いつまでもついてくるはずねえから……うん。ほつとこいつ。

無視しどこいつ。

引き離すためにわざと早歩きで進むと、女の子は駆け足で追つてくる。

俺の隣へ並ぶと、駆け足のままで話しかけてきた。

「ねえ、お兄ちゃん」

話しかけんな。

「ねえ

「つぜえよ。

「お兄ちゃん」

蹴飛ばしてやれりつか?

「お兄ちゃん…」

その後には予想だにもしない言葉が待っていた。

「”歩くイカ”知らない?」

「…………は?」

思わず足が止まった。

歩くイカ?

何言つてんだこいつ。

「”歩くイカ”…知らない?」

知らないも何も、無いだろ… そんなもん。

「”歩くイカ”…? ?」

「うん。」歩くイカ」「
女の子はにっこりと笑った。

……それが、俺の、最悪な日々の始まり。

茶色の飲み物

「”歩くイカ”探してるの。知らない？」

意味不明の言葉をはいて、女の子はいつまでもついてくる。ついに家までついてきました。

「お兄ちゃん」

「つるせえなーー！」

顔も見ずに俺は怒鳴った。

静かになつたので見てみれば、何事も無いよつてキョトンといちらを見上げている。

「ねえ……」

……知的障害者か？

とにかく放つておこう。

関わるとひくなことが無い。

『最低……』

ふとよみがえる自分自身の言葉。

『最低だよ。他人の事なんか、やつぱり関係ないんだ』

……ああ、そうだよ。

”あいつら”と、何にもかわんねえよ。省みれば、奇麗事ばかりぬかしてたんだな、俺は。

俺は扉を勢いよく開け、乱暴に閉めた。

アイツが入つてこれる隙なんてものは無い。

しばらく時間がたてばどつか行く。

放つておけ…少しばかりでかい猫だとでも思えばいい。

扇風機を回し、俺は買ったばかりの雑誌のページをめくった。

やることが無くて、いつの間にか眠っていて、テレビの音で目を覚ました。

く 次の一コースです。滋賀県大津市の連続放火事件… >
毎日の夜七時に放送している一コース番組。

五時間は…寝たのか？

寝心地は決してよくないソファのために、体中が痛い。

姉貴が帰ってきてる。

「…………姉貴？」

「あ、起きた」

姉貴とは違う、でも聞いたことがある声。

飛び起きて向かいのソファを見れば…アイツがいた。

「お”そ”よう…お兄ちゃん」

「おま…………なんで…」

「玄関の前で座つてたのよ」

夕飯の支度を一通り終えた姉貴が麦茶を入れたコップを三つ持ってきた。

「聞いてみたら『お兄ちゃんについてきた』だつて」

ありがと、と小さな声で女の子はコップを受け取る。

本当においしそうに麦茶を飲んで、姉貴に「おいしそ」という。

「ちやつちやと帰せよ。そんな不得体の知れないガキ」

本当に、さつさと帰れ。

図々しく人の家にあがりやがつて…

「それがさ…家を聞いても『無い』っていうのよ」

姉貴の言葉に合わせて「うんうん」と女の子はうなづく。
なにが「うんうん」なんだよこのガキ。

「それじゃあ警察にでも連絡して…」

「したわよ」

次の言葉が思い浮かばない。

姉貴が軽くため息をついて言つ。

「それでね、身元が分かるまで…ウチで預かる」となったから
「は！？ 何でだよ！？」

「仕方ないでしょー？ 警察で預かるわけにはいかないって、そう言
われたの！」

俺と姉貴が口論をしている最中も、女の子はポカーンと見ていろ
だけ。

さすがに我慢の限界。

「おいガキ！」

「なに？」

「ここにいらっしゃると迷惑なんだよ！ 家に帰れ！」

「歩くイカ”を見つけるまで帰らない！」

「はあ！？ ふざけんなよ！」

「正人！ いい加減にしなさい！」

まだ五、六歳の女の子よ！」

姉貴に一喝されて黙り込む。

「とりあえず…アンタが拾つてきたんだから、あんたが面倒みなさ
い」

「ご飯は作るけどね、と姉貴は付け加えてキッチンに戻つた。

居間に残されたのは、俺とこのアマガキと、飲み乾したコップ二
個と、全く口がつけられないコップが二個。

「まさとつていうんだね。よろしくね」

につこりと笑つて女の子は言つた。

「あたし、『いくみ』」

『いくみ』は俺のほうへ手を差し出しつきたが、俺はそれをあつ
さり無視した。

「なんで、俺が…？」

自分のことで、精一杯なのに。

黒色の最悪な朝

「まさとーー朝ーー！」

…」いつ。

いくみが来てから俺は毎朝六時に起こされる。

その所為で朝から見たくもない両親の顔を拝まなければいけない。

「まさと起きたよ。お姉ちゃん」

俺を起こしたこと得意げに姉貴に報告する。

「よしよし。大変良くできました！」

姉貴が満面の笑みで頭なんか撫でるから、コイツは余計に調子に乗る。

朝からイライラしながら、食卓につく。

座つて、顔を少し上げれば親父の顔。

アイツ “母親” “母さん”なんて呼んでいたのはかなり昔は仕事の為にもうでて行つたみたいだった。

親父のむつとした様子が、顔を見なくても分かる。

「正人」

「……」

「正人！」

「つるせえ…わざわざ怒鳴んな。

「返事をしなやー」

やだね。

何でお前なんかの命令を聞かなければなんねーんだよ。

「どうしてお前は…！」

次にくる言葉なんて限られている。

親父が口を開く前に、姉貴が先手を打つ。

「父さん…会社遅れるよ…」

その言葉で親父は勢いよく立ち上がり、乱暴な足音を立てて出で

行つた。

いくみはその様子をただ見ていただけで、驚く様子も無かつた。

「全く…小さな女の子の田の前で何やつてんのよ。あのバカ親父…」

姉貴が毒づく。

そして腰を折つていくみと田線を会わせる。

「ごめんね。怖かつた?」

いくみは首を振る。

「そう…いい子いい子!」

がしがしと頭を撫でられると、いくみは本当に嬉しそうな顔をする。

「いくみちゃん。お姉ちゃん、正人とお話あるから、正人の部屋へ行つてもうらえる?」

その言葉を聞きながら味噌汁や白米を口の中に放り込む。

「うん!わかつた!」

屈託の無い笑顔で答えると、いくみは階段を軽快に上つて行った。足音が真上に来たのを確認して姉貴はため息をつく。

「正人…あんたもあんたよ

…お説教かよ。

「あんたの気持ちはわかる。

”あんなこと”があつたら、私だつて…」

「わかつてんなら、わざわざ詰つなよ」

「でもね、過去の」とをこつまでも気にしてたうどつにもならないでしょ?」

「このままで、あんた…」

「……」

「…高校どうするのよ…」

またこの話か…

もうほつといてくれ。

「行く気…ない」

「私は、学歴なんか…そんなに気にする」とじやないと思つてゐる。

……でもね、世間は甘くない…

卒業で雇つてくれるとかなどないなんて、限りがちで…それ

『……』

「それには、あんたも男でしょ？

結婚する際、男の方が学歴のことが、とかかへんなれやすいのよ

そんなの、どうでもいい。

めんどくせー。

生きてこらへるとか、めんどくせー。

『お前なんか、十円の価値も無こんだよー。』

ああ、やつだな…

十円の価値も無い…

今日は特にやることはない。

仕方が無いから今週買った雑誌をくり返しきり返し読んでいた。

「まさと」

いくみが話しかけてくる。

面倒くさいから無視する。

「…まさと」

「…うるさい。」

「…」

しばらくするといくみは諦めて俺の勉強机に向かった。

ずっと使われていない勉強机。

引き出しには一つ一つ鍵がついているが、必要が無いからかけていない。

いくみは並べられている教科書に興味を持ち、背表紙を人差し指でなぞつていった。

ぴくり、といくみの指が止まる。

指が止まったのは、

「ねえ、まさと。これ読んでいい？」

「…英語？」

中学一年の英語の教科書。

五歳児が読めるはず無い…が。

まあ、どうでもいい。

「ああ…」

「へへつ」

嬉しそうにいくみは教科書を広げる。

紙面に並べれた異国の文字が面白く見えるのだろうか。とりあえず、これで静かになるのなら、文句は無い。

俺はいくみへの視線を雑誌に戻した。

ぱりぱりと、ページをめくる音だけが聞こえる。

「ねえ、まさと」

「ん?」

やば...

思わず返事をしてしまった。

「韓国では、食べる時にお椀持ち上げちゃ駄目なんだね」「教科書をみながらいくみは言つた。

おい、ちょっとまで。

なんでそれを今……あ。

ベットからおりていくみの見ている教科書を覗き込む。

< you must not bring the bowl up to your mouth . >

……ここつ、これ読めんのか?

「ほり、ここ……コウ マスト ノット ブリング ザ ボウル アップ トウ コア マウス……お椀をあなたの口まで持つてきてはなりません”だつて

…読めるんだな。

「くへつ…すごいでしょ！」

驚いている俺に得意そうな顔を見せる。

「ちつちやに頃から習つてたんだよ。

教室では一番だったんだ」

ああ…英才教育つてやつか…

お受験組の一人か?

「いい学校はいつて、就職する時に楽なようにだつて

「こんなちつちやい頃からそんな風に言われてんのか…

どつちにしる、こいつにはそこまでしてくれる両親が居るんだ。さつさと帰れ。

「でも…止めちゃつたんだ」

五歳児に似合わないしんみりとした表情でいくみはつぶやいた。

詳しく聞くと、多分面倒くさいことになる。

俺は聞こえないフリをした。

俺がベットにもう一度座り、雑誌を読み始めると、いぐみはまた

教科書をめぐり始めた。

赤い弓を引く

時間がゆっくつ過ぎる。

家の前を通る中高生がつるさい。

この雑誌は何回読んだのか知れない。

いくみも飽きずにつづと英語の教科書を読んでいる。

…と思っていたが、さすがに飽きて教科書を閉じた。

「ねえ、他の本無い?」

「そこにあんだろ」

本棚を指差す。

本棚を一通り見て、いくみは不満そうな声をあげる。

「ヤダ。

日本語つて面白くない

…英文が読みたいわけか。

「我慢しろ。いやなら帰れ

「……」

いくみはしかたなさそうに英語の教科書を再び開いた。

そしてまたゆっくつ時間が過ぎる。

いくみが口を開く。

「ねえ。引き出し見たら駄目?」

「駄目」

「なんで?」

別に俺としてはいいけど…さすがにショックでかいだろ…

「見てもいいけど、自己責任だからな」

「???:…じこせきにん?」

「自分で決めることだ」

あーもう面倒くさい。

「じゃあ開けるねー……」

左の引き出しを開いて、いくみの身体がすこし跳ねたのがよく分かつた。

…やつぱりな…

「なにこれ……？」

「なつて……血」

机の中には血糊がべつたり。

血糊のほかには果物ナイフが一つ。

「誰の血？」

「俺の血」

「なんで？」

「切つた」

右腕をいくみに見せた。

もう一生残るだろう切り傷の痕を。

「痛くない？」

まるで自分が痛いかのように顔をゆがませる。

「痛くない……？」

痛くないはずねえだろ？

でも、その痛みが快感なんだよ。

『狂つてる……あんた、狂つてるわ』

そうだ。

俺は狂つている。

桜色の貝殻

「まさと、暇」

「俺だつて暇だ。」

「火曜日だよ。どつかいこいつ?」

”火曜日”に何か意味があるのか?

いくみの文句を、昨日買った雑誌を読みながら聞き流していた。
…今週はどれも展開がつまらない…

「ねえ…」

はやく明日になんねえかな…

明日の雑誌は展開が面白いだろ?」

「ねえ!まさと!」

「つるつさいな!」

「どつかいきたい!」

あー…なんで「トイツは怒鳴られても平氣なんだよ。かわいくねえ。

「ねえ暇だよ。どつかいこいつよ!」

「んじやあ帰れ!」

「だから、”歩くイカ”を見つけるまで帰らないもん!」

「分けわかんねえこと…!」

「正入!つるさい!」

鳴る。

「連れて行つてあげなさいよ!…どうせ暇でしょ!?」

ぶつぶつ言いながら姉貴は自分の部屋へ戻った。

「ねえ、まさと…」

「…帽子とつてこい」

「はーい…」

嬉しそうにいくみは姉貴に帽子を借りに行つた。

ああ、俺のお人よし…バカみて…

『他人に優しくできるのって、人間だけなんだよ』

バカ言つてたな、俺…

いくみを連れて出たはいいけど…どこへ行けばいい?
ゲーセンに連れて行くわけには行かない…

遊園地に連れて行く金は無い。

コイツが喜びそうなところに連れてかなきや…ダメなんだよな。
「いくみ、どこ行きたい?」

「アメリカ!」

「真剣に答える」

「遊園地!」

「却下」

「動物園!」

「それも却下」

「水族館!」

「同じく却下」

「…」

「仕方ねえか…」

「海、行くか?」

ぱつといくみが目を輝かせる。

「うん!」

「んじや、ちよつとママチャリ借りてくる。待つてろ

俺は家のほうへいつたん戻つた。

いくみはしゃがんで俺のほうをじっと見ていた。

自転車は古くなつていたが、パンクもしていないしブレーキも
車輪が空回りするような音をたてて自転車は進んだ。
転ぐ。

自転車は古くなつていたが、パンクもしていないしブレーキも

こへみはじつと回じとじりで待つていた。

「ほり、後ろ乗れ」

「届かない」

「努力しろ」

「無理」

仕方ないからいくみを抱き上げて後ろに乗せる。俺が乗ると腹に手をまわしてきた。

「落ちてもしらねーからな

「うん。自己責任だよね」

「……」

思いつきペダルを踏む。

暑い日差しで出てきた汗が風で冷やされ、身体を冷やす。十分も走ると風に潮の匂いが混ざってきた。

「わーすーいひーーー！」

自転車から降ろすといくみははしゃいで走つていいく。

「海に落ちんじゃねーぞ」

「はーーー」

まあ、とりあえず見晴らしがいいから落ちても分かるけどな。

……海なんて……こつ以来だる。

目の前を小さな子供が走りぬける。

「お母さんー貝殻！」

『お母さんー美雪姉ちゃんが貝殻くれたよ』

「耳に近いでいいんだ。」

海の音が聞こえるよ

『正人、耳にあててみて。

海の声が聞こえるよ』

「...ホントだ！」

『す』い！ほんとだ！

お母さん物知り！』

：嘘みたいだな。

俺にも、あんな日々はあつたんだ。

あのガキみたいに、母親に甘えてた日々もあつたんだ。

緋色の記憶

海にいると日差しを強く感じる。

潮のせいか？

遠くに小さく見えるいくみは飽きずによつと海の波を見つめている。

「俺は飽きた。

そろそろ帰るか…

「あれ？ 正人？」

帰ろうと思つて腰を少し上げた瞬間声をかけられた。

振り向くと見慣れた、しかし最近は見ていない顔があった。

「おいおい。

オレを忘れた？

健治だよ。伊沢健治

「そんなこと、言われなくとも分かっている…

「覚えてるよ」

「…相変わらずだな」

健治は微笑むと俺の隣へ座つた。

「…お前、学校は？」

「お前が言えんのか？」

不登校の正人くん

「…

嫌なやつ。

「なーんて…

腕の治療の為に、病院行つた。

今日は学校休んだ

自分の左腕を軽く小突いて健治は説明した。つい最近まで、ギプスがついていたはずだ。

「…復帰できそうか？」

「いや、無理だな。完全復帰は……」

「お前なら、ベスト&ぐらじまでまた上りつめる」とへりこ、できるだろ?」

健治には空手で全国大会三位になるほどの実力が“あつた”。

そう…あつた。

半年前に、交通事故で左腕を複雑骨折をするまでは…
その上、骨の破片が神経を傷つけ、腕としての機能を失うかもしないと医師に言われた。そう言われながらも、奇跡的な回復を見せたが、それでも元のようにはならなかつたよつだ。

「駄目なんだよな…八位じや…」

「?」

「せめて前と同じ、もしくは前より高い実力になんかきや…」

「…そうか…」

俺が次の言葉を言おうとした時に、

「まさとーー貝殻貝殻!」

いくみが走つてきた。

手には拳大の巻貝が握られている。

「何あの子。彼女? 小さいなー」

なぜそうなる。

「あ…」

いくみが健治に気づき、足を止める。

健治は右手を上げて「よつ」と短い挨拶をした。

「はじめまして。まわとのお友達?」

「ん。いざわけんじ。よひしく」

「よひしく。あたし、いくみ」

「いくみちゃんかー。いい名前だ」

いくみの頭を撫でて健治は笑つた。

「けんじくんは優しいね。

まさとと大違い」

「じゃ、健治の家に行け」

「おいおこ…それはちゅうと…」

健治が苦笑する。

その間にいくみは俺の前に貝殻をおいてとまた海の方へ走つて行つた。

子供好きの健治は楽しそうにいくみを見ていた。

「で、なんなんだ？あの子

「居候」

「いそうひつ？なんだやつや？」

「他人の家に世話になり食べさせてもらひつ」と。また、その人。食

客

辞書に書いてあるとおりのことを言つた。

「嫌な奴だな」

「……」

「そうじやなくてだな…なんでこのじ時世に居候なんか居るんだ？たしか、おまえんとこは両親共々兄弟いねえから従兄弟とかいねえよな？」

「再従兄弟か？」

「住所不明。苗字不明」

「はあ？」

「はあ？はこっちだ。

「”歩くイカ”とやらを探してゐるんだぞ」

説明するのが嫌になつてくる。

さすがに健治も笑うしかない、といつ様子。

そしてその笑顔も消え、真剣な表情になつた。

「…学校…どうするんだ？」

姉貴から何度も言われている言葉を、今まで健治に言われた。

「受験は…」

「…一ヶ月行ってねえんだぜ？」

一ヶ月…もつと長かつたような氣もするが…

「お前、頭はいいからさ…まだ間に合つかも…」

「無理だね。

数学や英語はもう未知の領域に入ってるだろ」

「高校の問題も解けるお前が言つ言葉とは思えないけど」

いつも、健治に口論で勝つたことはない。

今のが口論と言えるかどうかは、わからぬけど。

「教えてやろうか? どこまでやつてるか」

「いい」

「数学はアレだ…一次関数…が終わつたな…あと…」

「いいつて

「英語が…なんてんだっけ…”フレーム”とか”ホワイ”とか使う

…ああ、関係代名詞

「いいつて言つてるだろ!」

俺が大声を出すと健治は黙つた。

驚いた様子もなく、先ほどまでと同じように遠い一点をただ見て
いた。

俺も、何も言えなくなる。

そういう時は、決まって健治が口を開く。

「…辛いとは…思つけど…」

「…」

「今耐えれば…そのうちこいことに巡り会えるつて

いいことつてなんだよ。

「よくお前…耐えられるよな」

「バカにはなに言つたってわかんねえよ。

忘れようとするしか、逃げ道ねえだろ? う。

コンクリに頭ぶつけでモさ」

最後の言葉を、健治は冗談っぽく言つたが俺は知ってる。

校舎の裏で、悔し涙を流しながら、何度も何度もコンクリートの
壁に頭をぶつけていたことを。

額に血がにじむほど、ぶつけていた。

狂つているように見えたかもしない。

でも、健治には他の逃げ道がない。

「片腕でも、相手ふつとばすくらいのことは、できるだろ……」

「手を出したら負けだ」

「そうして、”勝った”と自己催眠をかけんのか？」

「……ああ」

健治は微笑んだ。

なぜ健治はそれで耐えられる？

話している間にも、”あの頃”のことが思い出される。

同級生に言われた言葉。

親や教師に言われた言葉。

だれも、なにも、しらないくせに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7778a/>

僕らはねじれの位置にいた

2011年10月3日11時18分発行